

2. 法隆寺出土古瓦の調査

考古第3調査室では、出土品、寺蔵品を含めた法隆寺の瓦類の調査、研究を継続して進めているが、今年度は平安時代から近世にいたるまでの軒丸瓦について、一応のまとめをみた。

平安時代の軒丸瓦　平安時代の軒丸瓦は、文献に残る主要な堂宇の修理あるいは再建の記録との関係から、大きく次の3つのグループにわかれる。1：東院に分布が集中し、貞觀元年（859）の道詮による東院の改修に用いられたと考えられる9世紀後半のもの。2：西院に分布が集中し、正暦元年（990）の講堂の再興とその5年後の長徳元年（995）に終った金堂の修理、寛弘2年（1005）から寛仁2年（1018）にかけておこなわれた五重塔の修理に用いられた10世紀後葉から11世紀前葉のもの。3：12世紀前葉を中心とした西院の塔、回廊、食堂、講堂、東院の夢殿などの修理の用いられた瓦である。

これらを基準にして、製作技法を検討すると、平安時代の場合、それ以前と比較して、ヴァラエティーに富む。それは、同型式さらには同種においてさえ、いくつかの異なった製作技法を認めるができるほどである。瓦当部と丸瓦部との接合については、一本造りである場合を除き、基本的には接合溝が認められるが、それには、範状工具でつけたものから、指でU字形の溝を彫ったもの、さらには指で浅くなれてくぼませただけのものまである。ところが、一方で、接合溝のないものもある。丸瓦胴部先端の加工については、10世紀代までの例では、面取りに近いものがあるが、基本的には凹面側を削っている。12世紀前葉になると、丸瓦の先端を削る例は逆にごく稀になり、大半は未加工のままである。丸瓦胴部先端の凹面側・凸面側の刻み目については、主として凹面側に平行、あるいは斜格子の刻み目がつけられているが、数量的には平安時代軒丸瓦全体の一割にも満たない。また、瓦范は、基本的には、外縁部まであるいは外区内縁までであったと考えられる。調整手法は、時期が降るにしたがい、次第に削りからなでが主体となる。平安時代の軒丸瓦の場合、いくつかの製作技法が混在しており、飛鳥～奈良時代の軒丸瓦に認められるような製作技法の統一性に欠けるきらいがある。それは法隆寺の造瓦集団がそれほど組織的に管理されたものではなかったことを物語っていよう。（小林）

法隆寺の軒丸瓦（平安時代）

中・近世の軒丸瓦 瓦当文様の主流は、平安時代末期に採用された巴文である。古代以来の蓮華文も鎌倉時代まで残り、「法隆寺」などの文字文、菊花文などが新たに加わるが、少ない。これらの軒丸瓦の編年には他寺に類を見ない紀年銘丸瓦の製作技術の研究の援用が有効である。

鎌倉時代 巴文は三巴が主流である。巴文の頭部は独立せず、頭部同士接着するもの、先が尖がるもののが、中央に円点をもつものがある。断面形は前代以来の台形か、台形気味。中期には文字文が出現する。瓦の全長は40cm以上、丸瓦部の厚さは2cm。丸瓦部凹面の布目が前代まで3cm四方あたり15~30本だったのが、30~45本と密になる。この布目は丸瓦製作時に芯棒に被せる布袋の痕跡だが、粘土板が袋に固定しやすいように袋に1~2条横方向に紐を通すようになる（吊り紐）。瓦当裏面の調整は接合部まで広く平坦になでられるようになり、裏面と顎面、裏面と丸瓦側面はそれぞれ直角をなすなど、前代とは異なった特徴をもつ。

室町時代 瓦の全長は38cmほどになるが、丸瓦部は3cmと厚くなる。巴文は初期の頭部が尖り気味であるが、頭部は時間を追って大型化し、独立化し、断面形も半円形になる。珠文数も減少して20~25となる。吊り紐は波長の大きい波形→ℓ字形→ℓ字形に結び目を作るもの、上下二段につなぐものと変化し、粘土板の固定力を増強している。中期（15世紀）以降、瓦当などの縁辺部を面取りし始める。後期（16世紀）になると丸瓦部の湾曲を一定にするために、凹型成形台に瓦を置き、凹面を板状工具の側面で押圧する工程が加わる（内叩き）。また、丸瓦の先端にも刻み目を加えた後に瓦当と接合するものが現われる。瓦当裏面のなで調整に瓦当円周に沿うなでが加わり、また、瓦当裏面と丸瓦側面が直角でなく、曲線をなすように仕上げられる。

桃山・江戸時代 該期の最大の特徴は、丸瓦用粘土板の粘土塊からの切断方法が、糸切り法からコビキ（鉄線を張った糸鋸状工具）法に変化する点である。全長は約35cm、丸瓦部の湾曲もさらに弱まる。吊り紐は17世紀まで残る。丸瓦の接合時には瓦当裏面側にも刻み目を加えるようになり、接合粘土も減る。文様の内圈線は17世紀までは残る。珠文直径も1cm未満だったのが、18世紀以降は1cm以上となり、数も20以下となる。外縁幅も内区径に比べて広くなる。

以上の結果が大和、他地方にどの程度あてはまるかが、今後の大きな研究課題である。（佐川）

法隆寺の軒丸瓦（左：鎌倉時代、中：室町時代、右：江戸時代）